

新型インフルエンザ先行国の状況

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：新型インフルエンザ，南半球，米国，入院，死亡

要 旨

新型のパンデミックが本格化してきたが島根県は季節性の流行期と重なるかもしれない。南半球では5～9月に重なり74～94%が新型であった。各国で国内の地域差が大きい。オーストラリア (Aus) の新型による年代別人口当り入院率は、5～64歳は例年の2倍以上で、50歳代は3～4倍になり、85歳以上は例年の約1/3である。日本は秋まで小中学生の入院が特に多いが、青壮年や年少児の増加が懸念される。日本の10月6日時点の在院者は297名、ICU治療中29名、死亡21名であるが、人口約1/6のAusではピーク時に在院者460名、ICU治療中110名に達し183名が死亡した。Ausの小児の重症入院115名はウイルス性肺炎と脳症が主体で、11名が死亡した。妊婦は第2三半期以降のリスクが高い。米国では細菌共感染が注目されている。

はじめに

世界が新型インフルエンザ (以下、新型Flu) のパンデミックの最中にある。日本は5月に主に近畿で発生した後、6月より全国で漸増し、定点当りの報告件数は33週 (～8/16) に1.7と流行を示す1.0を超え、40週 (～10/4) に6.4になった。

厚労省の8月末発表の「流行シナリオ (罹患率20%)」では流行は10月上旬にピークとなり、1日の入院中患者数は4万6千人、期間中の重症患者は4万人弱とされた。学級閉鎖の徹底などもあり、

ピークは11月以降にずれ、特に島根県などでは冬季に季節性Fluと重なる可能性もある。

南半球は新型Fluの流行と冬季が重なりより大きな流行となり、9月末には既に終息してきた (北半球の流行が再び影響する可能性はある)。また、米国は5.6月をピークに流行し、8月末までの推計累積罹患者は100万名を超え¹⁾、夏の第1波とされている。

これらの国々の実態の把握は、11月以降の日本の状況を予測し判断するうえで教訓になるであろう。手元の資料をまとめてみた。

I. 南半球の国々の概況

1. 南半球 南半球では5月～9月 (北半球の

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613